

共に愛し合う精神～同志社が上州に蒔いた種

共愛学園前橋国際大学 宗教主任 古澤 健太郎

はじめに

私が同志社大学神学部に入學したのは1997年度のことになります。日本にはよくある「あえて言うなら仏教」の家に生まれ育ちましたから、それまで教会なんて行ったこともなく、模試の判定で神学部ならあの有名な同志社大学に入れそうだから、という理由で受験、入學を決めました。この話をすると、笑ってくださる方、眉をひそめる方、様々です。

新島襄は「同志社大学設立の旨意」の中で、「もちろん、この大学からはあるいは政党に加入する者が出るかもしれない。あるいは農業、工業、商業に従事する者が出るかもしれない。あるいは宗教のために働く者が出るかもしれない。」と述べてもおられます。まさか自分が伝道師となり、その「あるいは」のうちに入るとは入學したときには思いもしませんでした。

その後、私は2021年に群馬にあるキリスト教の伝統を持った大学、共愛学園前橋国際大学に着任しました。いまだ短い在職期間ですが、それでも、上州の地と同志社が強く結びついていることや、キリスト教教育の種がしっかりと蒔かれてそれが今に至るも強く根付いていることを折りに触れ、幾度も幾度も感じます。管見（かんけん）ながら群馬でお聞きしたことや感じたことなども交え、同志社と共愛のつながりを中心にお話を進めていきましょう。

今回は試みに、群馬とは別に「上州」という語を使います。上州を指し示すかつての上野国（こうずけのくに）、上毛野国（かみつけのくに）は、時代によっては完全に群馬県と一致しますが、昭和 30 年代から 40 年代にかけて足利の一部が分離して栃木県になったため現状とは少し違います。ただ当時の資料を見ていると、やはり足利も含めて「上州」を一地域と認識しているような記述は枚挙に暇がありません。キリスト教と関係なくとも地域の気質を指し示す際の「上州人」という言葉は今も一般的に用いられていますから、やはり行政区分とは違う土地感覚として大切にするのがふさわしいように思えます。

共愛学園前橋国際大学

まずは今回のテーマに深く関わってくる「共愛学園」について紹介させてください。

共愛学園は前橋市に本部を置く学校法人です。1888年に、上州のクリスチャンを中心として国内外の様々な支援を受けて設立されました。現在はこども園、小学校、中学校、高等学校、短期大学、大学を運営しており、群馬県内では唯一の総合学園です。

同志社との関係もさることながら、創立当初から太平洋戦争直前に至るまでの間、宣教

師派遣団体の一つであるアメリカン・ボードと密接な協力関係にあり、宣教師の住宅であった建築物が現在も敷地の中に保管され重要文化財となっているなど、130年を超える歴史の中でキリスト教主義の伝統を連綿と受け継いできました。

私の所属部門である共愛学園前橋国際大学の設立は、学園創立1888年から111年を経た1999年です。覚えやすいですね。創立当初の共愛学園は基本的に現在の中学、高校を中心に存続していますが、1988年に新たに「共愛学園女子短期大学」が設立されました。その後、この女子短期大学が改編されるような形で1999年に男女共学の「共愛学園前橋国際大学」が開学することになります。現在は国際社会学部のみ設置の単科大学ですが、数年内に短期大学部と合流して初めて複数の学部を持つことになります。必修科目のうち1つが「キリスト教概論」と、それに付随する「チャペルアワー」で、1年生のうちは必ず参加することになっています。基本理念には「共愛・共生の精神」が掲げられ、ヨハネによる福音書 15 章 12 節「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」が大学の理念とされています。

地域との結び付きが強いことも特徴で、大学の名前に「前橋」が冠されているのは、学園創設初期の名称が「前橋英和女学校」だったから、というだけではありません。共愛学園前橋国際大学は、開学当初から前橋市の様々な支援を受けていましたし、協力関係を続けてきました。今でも学内では様々な地域活性化プログラムに参加する学生の皆さんの様子を見ることができます。

本当に幸いなことに、キリスト教主義の伝統を大切に、地域の皆様にも支えて頂いて、共愛学園前橋国際大学は今日なお様々な発展を続けていると言っているかもしれません。

さて、そこで今回のテーマとも関わる課題が浮かび上がってきます。

このような教育機関の発展において、間違いなくこれまでこの学園を形作ってきた「キリスト教主義と教育の伝統」は、どのようにあるべきなのでしょう。

これまでと同じでよいのか。もういっそのこと宗教のような面倒くさいものは、影のように薄めて痕跡のようになってしまうのがいいのだろうか。あるいは、より一層キリスト教教育に注力していくべきなのだろうか。だとしたら、それはどのようにあるべきなのか。

Doshisha Spirit と、共愛・共生の精神。これらの結びつきについて考えることは、きっとこれからのこの国と社会にとって有用で、重要な事柄です。結論的なことは言えないかもしれませんが、まずはその歴史を紐解くことから始めてみましょう。

1886年 前橋英学校設立

共愛学園の創立は1888年の「前橋英和女学校」開学時点と定められています。しかし

その前身である「前橋英学校」は1886年に活動を開始しています。初代校主は熊本バンドのメンバーである加藤勇次郎です。加藤は同志社英学校を卒業し、同志社女学校で教員も務めました。また第二代校主となったのは同じく熊本バンドのメンバーでもあった不破唯次郎（ふわたじろう）です。不破は「前橋英和女学校」の初代校長にもなっています。

これほどまでに現在の共愛や同志社と深い関わりのある「前橋英学校」が共愛の起源とはされていないのはなぜでしょうか。

理由の一つは、前橋英学校が私塾のような位置づけにあったからです。今でも上州人の気質の一つに「新しいもの好き」が挙げられますが、明治のころにはそれが海外文化ブームとなって現れていました。しかも上州では養蚕製糸業をきっかけとしてキリスト教のネットワークが地域に広まっており、進取の文化に対する興味は一層強いものでした。そのため、英語を含めた外国の文化を習いに行くための塾が開設されたのです。

しかし、前橋英学校が創立起源ではない理由はそれだけではないように思えます。もう少し時代を先に進めてみましょう。

1888年 前橋英和女学校開設

群馬県は今日でも根強く男女別の公立高校が残っていますが、1886年の時点で前橋英学校は既に男女が一緒に机を並べる共学の学校として開設されています。おそらく熊本バンドの L.L.ジェーンズが熊本洋学校を男女共学として開設した薫陶（くんとう）を、加藤や不破が受け継いだのでしょう。

ところが「前橋英学校」は設立後間もなく経営不振に陥ってしまいます。

当時、男女共学校の意義が「女子でも教育を受けることができる」という点にあったことは想像に難くありません。1885年時点の児童就学率は男子児童 65.8%、女子児童に至ってはその半分以下の 32.1%だったことがわかっています。その背景には、女子に教育は必要なく、家の仕事を手伝うものだという旧態依然とした社会の価値観がありました。

前橋英学校は午前の部と午後の部に分かれていました。家の仕事をしていてもどちらかは勉強に行くことができるようになっていたのです。この前橋英学校がなくなるということは、女子教育の機会が大きく失われることを意味していました。

この危機的状況に、前橋英学校教師の不破きよ、その姪で同じく教師であった村山ゆき、英学校の事務を担っていた笹尾縫（ぬい）の三人が、周囲のキリスト者たちを中心に女子教育存続の必要性を強く訴えます。不破きよは神戸英和女学校出身のクリスチャンで、不破唯次郎（ただじろう）はきよの配偶者です。村山ゆきはきよの姪にあたり、同じ神戸英和女学校を卒業しています。笹尾縫は東京で洗礼を受け、英学校の土地所有者であったクリ

スチャン、笹尾精憲（せいけん）と結婚し学校運営に関わっていました。

この訴えを受けて県内の有力者たちが「鍋屋旅館」に集まり、女子学校開設について協議します。折しも藩閥政治を批判して展開される自由民権運動の機運が高まり、先進的な思想を持つキリスト者は官憲の目の敵にされていました。旅館での会合中、保安条例違反を理由に警官隊が突入し、一同は逮捕されます。結局は嫌疑不十分ということで釈放されますが、このような社会を変えていくためにも先進的な教育は絶対に必要だと決意を新たに、女子学校開設はなお一層上州キリスト者の強く望むところとなります。これを「鍋屋事件」と称します。事件が2月 29 日にあったことから、共愛学園の創立記念日は今でも2月 29 日です。4年に1度しかないため、戦後から 10 月 29 日に「創立記念の祝日」が制定されました。

同年6月には早くも新しい教育機関が開設します。これが「前橋英和女学校」です。

こうした経緯からは、前橋英学校と前橋英和女学校の「私塾と学校」という制度上の違い以上の意味が浮かび上がってきます。確かに両者ともに熊本バンドや同志社に名を連ねる面々に創設された教育機関です。しかし「前橋英和女学校」は、ただ外国文化を学ぶために始められた前橋英学校と違い、社会にないがしろにされ苦境にあった女子教育をなんとしても存続させるという福音的理念のもとにありました。そのために集まったキリスト者たちは弾圧され困難に遭いましたが、それでもキリスト教主義とその教育こそがこれからの社会を支える人材、とりわけ女性を育成するためには必要不可欠なのだと決意します。いわばこの決意こそが我々の起源なのだという意思の表れが、鍋屋事件の日付を創立記念日にするという選択に現れているのです。

不破唯次郎の書簡

前橋英和女学校創立に関してもっともよく引用される資料が、初代校長となる不破唯次郎が自らの恩師である新島襄に送った書簡です。不破はキリスト教有志団体である上毛（じょうもう）青年会や、あるいは上毛基督教婦人会、地域の各個教会に呼びかけた他、恩師の新島襄や、アメリカから来ていた宣教師たちにも協力を仰ぎます。前橋英和女学校の設立趣意書には、校長不破唯次郎の他、新島襄らも名を連ねていました。

不破から新島へ送られた書簡から抜粋し、要約したものを翻訳します。

「先日の信徒大会で杉山牧師と杉田牧師が、前橋の女学校を上毛のキリスト者の一大事業として拡大していこう、そのために新しい組織を作ろうと提案しました。みんなこの提案に賛成し、女学校のために力を尽くすことにしたのです。アメリカン・ボードのデフォレスト先生は、マウント・ホリヨーク・セミナリーの卒業生を教師として派遣すると約束してくれました。な

んとすばらしいことでしょう。先生もぜひ、上毛のため日本のため、新しい組織の発起人の一人になっていただけませんか」

新島はこの要請を快諾し、女学校設立にさまざまな援助をしていきます。例えば当時の土地購入記録を見ていると、前橋市岩神町という土地に共愛学園があって、その周りの土地はアメリカン・ボードが使っていましたが、当初は同志社の名義で購入されていることがわかります。その土地には宣教師が住んで教育に貢献したり、後々幼稚園ができたりと、共愛にとってはとても大切な働きをします。

「同ボードはこの地番以外にも相前後して周辺の土地（中略）を獲得していたことが知られ、それは形式上は同志社またはその他の個人名義で処理されていた」〔共愛学園百年史上巻 1998年 217頁〕

共愛学園の草創期は、まさに同志社の力なくして立ち行かなかったことは間違いありません。

また、不破の書簡では、「マウント・ホリヨークの卒業生が教師として来る」ことが「すばらしいこと」として特筆されています。マウント・ホリヨークはアメリカで最も古い女子大学で、今でも難関校としてあげられる名門学校です。創設者のメアリー・リヨンの自伝『メレイライヨン一代記』が日本で1883年に出版されていますし、当時女子学校では目を通す機会が多かったはずの『女学雑誌』ではまさに1888年、メアリー・リヨンの特集が組まれています。

件の信徒大会については残念ながら資料が残っておらず、不破の述懐以上のことがわかっていません。しかしやはりここには、「世界でも最先端、最高レベルの女子教育を上州の地で」という思いがあったのではないかと思います。

前橋で活動した女性の宣教師 12 人のうち4人がマウント・ホリヨーク出身であったことがわかっています。中でもその1人、ファニー・E・グリスウォルドは、33年にわたって宣教師館に居住し、共愛や前橋市内の幼稚園教育、婦人会活動に携わっています。

1889年 上毛共愛女学校

1889年、前橋英和女学校を支援する「共愛社」が発足します。「共愛」が最初に用いられたのは学校の名前ではなくて、学校を支援する結社の名前でした。このネーミングですから「同志社」が念頭にあったことは間違いないと思うのですが、残念ながら命名の詳しい記

録は見つかっていません。

開学当初、前橋英和女学校の教育環境は十分とは言えないものでした。宣教師メアリー・シェッドはアメリカン・ボードに次のように書き送っています。

「女学校の校舎は荒れ果て、教えるにしても黒板とクレヨン以外にはまともな設備や教材はありません。それでも私は十分に感謝していますが、何もない生徒は気の毒です。」[新島学園女子短期大学他編訳 1999:52]

こうした状況を受け、共愛社と前橋英和女学校は以下の三つの目標を設定しました。

- ①静かで広い土地を見つけて引っ越す
- ②校舎と寄宿舎を建てる
- ③校名を変更する

幸い同年のうちに候補地が見つかり購入に成功します。ここが先述の前橋市岩神町です。岩神校地購入にあたっては、当時の金額で250円が支払われたことがわかっています。内訳が明らかになっているのはそのうち150円で、これを「上毛基督教婦人会」、つまり超教派の教会婦人団体が担っています。

上州のキリスト者たちには、自分たちで土地を購入した自分たちの学園、という意識があったようです。『共愛学園百年史』の記述を引用します。

「急いで新たな土地を用意し、新寄宿舎と新校舎を建設しようとする女学校拡充計画が浮上する。しかしその実現のために相当額の資金が必要であることは誰の目にも明らかであった。

不破らはその実現の鍵はアメリカン・ボードやミッションからの寄付金にあると考え、デフォレスト、ゴルドン、グリーン、ベーケル各師らの宣教師やボードの本部、更には新島襄らに働きかけをしていた。(中略)しかし本当のところ上毛のキリスト者の動向こそが真の意味で女学校拡充問題の成否を握っていたといつてよい。」[共愛学園百年史編纂委員会 1998b:213—214]

「共愛社所有地五百一坪は仮に一坪五十銭として約二百五十一円を要することになり、レプタ献金に百円を上乗せしなければならない。差額は上毛のキリスト者の努力の賜物では

なかろうか。」[共愛学園百年史編纂委員会 1998b:218]

前橋英和女学校はこの土地への移転にあわせて、校名を「上毛共愛女学校」と変更しました。ここで初めて「共愛」の名前が学校名として採用されます。

1905年 共愛女学校

次に校名が変更されるのは1905年のことです。名称はよりシンプルに「共愛女学校」へとなりました。名称変更の広告が載った雑誌にはこんな解説が加えられています。

「聞く、初め校名を附せんとするに当り、単に共愛女学校にては、前橋の女学校の如くなりて上州一国の人の同情と賛助とを得難しとて『上毛』の二字を附するに至りしなりと、然るに今や校運愈々進み、九州より来学せる生徒もある際、上毛の二字ありては日本国の女学校として有志の生徒を集めんに如何にも狭義なるを覚ゆ(…………….)とて此二字を削去することとはなりたり、亦以て校の進歩と時勢の進歩とを見るべきなり。」[共愛学園百年史編纂委員会 1998b:415]

最初は「前橋」英和女学校でした。続いて前橋に限らず広く地域を網羅する意味で「上毛」共愛女学校を名乗ったけれども、今度は上州に限らず全国に広がろうという意味で上毛を取って「共愛女学校」とした、という経緯が説明されています。

この共愛女学校は、後に共愛学園中学、共愛学園高等学校へと移り変わっていきます。

さて、ここまで英学校から始まった共愛学園の草創期を見てきました。

再び「同志社大学設立の旨意」を見てみましょう。新島は其中で大学設立の志と、キリスト教が持つ力をこんなふうにまとめています。

「私たちはキリスト教を広めるために大学を設立するのではない。ただキリスト教主義には本當に青年の精神と品行とを磨く活力が備わっていることを信じて、この主義を教育に適應し、さらにこの主義でもって品行を磨く人物を養成したい、と願うだけである。」

上州社会の中で女子教育の存続とその発展という社会課題に直面した新島の教え子たちが、キリスト教主義をその礎として、先進的で、世界的な視野を育てる教育機関を作るために奔走し、実現させ、発展させました。これこそ、同志社が上州に蒔いた種の最初の芽吹きではなかったかと思います。

その後も、代々の共愛女学校校長には同志社と深い関わりを持つキリスト者が名を連ねます。例えば第二代校長杉田潮は同志社の神学科を卒業しています。第四代校長の堀貞一は後の同志社大学宗教主任ですね。第七代校長は新島に師事し、海老名弾正（だんじょう）から洗礼を受けた柏木義円（かしわぎぎえん）です。第九代校長となるのが同志社でも教鞭をとった周再賜（しゅうさいし）ですが、その「周時代」について説明する前に、一旦、同志社が種を蒔いた「上州」がいったいどのような場所であったのか、見ていくことにしましょう。

上州とキリスト教

共愛や上州にはこんな素晴らしい同志社の影響があるんだ、というお話を進めていますが、それとはちょっと違った興味深いコメントを、とある群馬県の教会信徒の方々からお聞きしたことがあります。

「群馬や足利は、エキュメニカルが叫ばれるだいぶ前からそもそも超教派だよ」

これは上州のキリスト教を考えるにあたって大切な視点なのではないかと思います。

理由の一つは、冒頭で述べたように「群馬と足利」が一括りにされている点です。まさに現代でも通じる「上州」という地域感覚ではないでしょうか。そしてもう一つは、「エキュメニカル」であること、つまり教派の違いを超えて力を合わせていく特質が上州の教会の伝統であったことを示していることです。

このコメントを収集した教会も非常に長い歴史を持ちますが、紐解いていくと同志社とのつながりの他に正教や救世軍といった様々な教派との交わりが明らかになります。

共愛学園についてはどうでしょうか。確かに学園創設に関して同志社の協力やアメリカン・ボードの影響が非常に大きいことはこれまで見てきたとおりです。しかしながらそれ以外にも様々なキリスト教諸教派の働きがあることは無視できません。

その代表的な例が深澤利重です。深澤は学園の第二代理事長を務めた他、共愛女学校協賛のために立ち上げられた財団法人である「共愛社」で晩年まで理事の任に就いていました。同時期に校長であった周再賜は、「深澤翁は共愛を我が子のように愛し、共愛のこ

ととなるとそれが自分の意見と異なっているとしても我を忘れて共愛のために尽くした」と書き残しています。

深澤は現在の日本ハリストス正教会で洗礼を受けたクリスチャンです。1934年に亡くなりますが、その時、共愛女学校では学校葬として正教会の形式に則った学校葬が執り行われました。

共愛学園の歴史では熊本バンド、同志社と関わりのある人物の名前が目立ちます。しかし学生やその家族、教職員、役員、支援者は様々な信仰背景を持っていたはずで、今後の詳しい調査分析が望まれます。

『同志社時報』の中で、当時、香里中学校・高等学校教諭の萩原俊彦先生が共愛学園の超教派性をこんなふうにまとめてくださっています。

「なお、同校を組合教会の学校と見るのは誤りである。理事の深沢利重はロシア正教会員、森川抱次は救世軍、森村堯太は日本キリストであり、言わば超教派の学校としての色彩が濃厚であった。その傾向は現在にも継承されており、安中教会主導の新島学園とは異なる性格を帯びていた。ただその中でやや、組合教会系の理事・役員が多かったと言えよう。」
[萩原 1997:41]

上州に根付いたキリスト教の多様な豊かさの中にこそ、同志社が蒔いた種がしっかりと芽を出したのだと、私達は考えなければなりません。

共愛学園中興の祖、周再賜

さて、同志社と教会の関係に視点を戻すことにします。

1925年から1965年まで40年の長きに渡って共愛学園の校長を務めたのが周再賜です。周は奇しくも学園創立と同じ1888年に台湾で生まれました。父親はキリスト教の伝道師で、周も生涯にわたって伝道者としての活動を熱望していました。当時の台湾は日本の植民地で、キリスト者は迫害され、台湾人は差別されました。苦しい状況であっても学業優秀な周は日本に留学し、牧師になることを目指して同志社で学ぶようになります。

周は同志社でも差別を受けました。日露戦争後、第一次世界大戦前の日本で、同志社といえども帝国主義・排外主義の風潮からは逃れられなかったことが伺えます。しかし、そうした差別を批判して周を庇い、切磋琢磨し合ったのも同志社の学友や教員でした。

卒業後は牧師を志しますが、ここでも日本国内で台湾人を推薦できる教会はないと断ら

れてしまいます。やむなくアメリカ留学を選択しますが、やはりアジア人差別に直面します。しかしアメリカで学ぶ中で多くのキリスト者たちと出会い、日本人クリスチャンとの親交を得て、日本に戻り母校である同志社で教鞭をとることになります。

授業の評判が良かったことは証言されていますが、しかしその生活も順風満帆というわけには行きませんでした。太平洋戦争を目前にした軍国的社会情勢の中で、重要な局面で大きな仕事から外されることもありました。確かな証拠はないものの、やはり台湾出身者に対する差別だった可能性が指摘されています。

周の去就を決定的にしたのは海老名弾正との衝突でした。当時同志社総長であった海老名は、その人脈を通じて優秀な人材を同志社に抜擢していきます。財政改革を行うなど様々な経営手腕を発揮し、この時代に同志社は大きく発展していくことになります。必然的に行われる大人数教育に対して真っ向から反対したのが周再賜でした。キリスト教主義による教育は、少人数に対して一人ひとりとの関わりの中でこそ得られるべきものでなければならない、というのが周の主張でした。

周再賜の神学における大きな特徴の一つは、権威主義に対する絶対的な拒絶です。差別を受け続けてきた半生と無関係であったとは思えません。海老名を糾弾するビラを配布するなど、辞めろと言うならいつでも辞めてやるという気持ちでいた、とされています。

なんとかこの状況を上手く収めたいと考えた友人たちが、当時新しい校長を探していた共愛学園に行くことを周に勧めます。周は悩み抜いた末にそれを引き受け、同志社を去ることになりました。

周再賜と共愛学園

共愛女学校着任後の周は、献身的な活動と偉ぶるところのない人柄で親しまれ、指導力を発揮し、共愛女学校には次第に入学者が増えていきます。とある卒業生は、当時を振り返って次のように述懐しています。

「私が共愛にいたころうれしかったことは、校長先生と生徒たちとの間にすこしも隔てがなかったこと、又校長先生が先生も生徒も同じ様に取扱われたことです」[清水編 1976:111]

共愛学園での活動や著述から明らかになってくる周の神学は、「きわめて理性的、倫理的、実践的」と評価されるものでした。その屋台骨となっていたのは社会的福音と自由主義神学です。つまり、キリスト教の倫理で差別や戦争の危機といった社会的な問題に立ち向かう

という実践性を伴った考え方と、教会の伝統的権威から自由になって聖書や宗教を研究しようとする考え方です。

もちろんアメリカ留学中の学びもその神学に大きな影響を与えたのですが、しかしその端緒はやはり同志社でした。周はかつて同志社時代に自主退学を考えた時期がありました。それを思いとどませたのが恩師の一人、日野真澄です。日野は周に自分の書斎を使わせ、同志社で学び続けることを強く勧めます。

日野はかつてニューヨークのユニオン神学校在学中、自由主義神学者のマギファートの下で学んでいました。後に周がやむなくアメリカに留学したとき最初に学んだのは日野と同じユニオン神学校で、マギファートは当時同校の校長になっていました。

周の着任から 16 年後、日本は太平洋戦争に突入します。しかし周は戦時中もアジアからの留学生を受け入れ、影に日向に戦争批判を繰り返し述べます。本来ならできないはずの英語教育を続け、修身の教科書を開かせておいて聖書の授業を続けていたという逸話が語り継がれています。

現在の共愛学園前橋国際大学が掲げる理念は多岐に渡りますが、国際感覚や共生思想、人材育成、そしてそれらを支えるキリスト教主義は、まさに周再賜が体現していたものと言ってよいように思われます。そして周が日野を始めとして同志社で受けた様々な薫陶を見て取ることできるでしょう。

一方で周は、後年まで同志社に対しては複雑な心境を抱いていたようでした。やはり海老名弾正との意見の食い違いを長く引きずっていたことが伺えます。

この二人の考え方の違いは私達に大きな示唆を与えてくれます。もちろん「どちらが正しい」というようなことが言えるわけではありません。しかし両者の思想、神学を学び、研究し、新たな知見を積み重ねていくことこそが、キリスト教主義に基盤を置いた高等教育機関に関わる私達の使命であり、新島襄が「同志社大学設立の旨意」で語った理想をこの社会に実現していくことへ繋がって行くのではないのでしょうか。

おわりに

到底事細かな説明とはなり得ませんが、同志社が上州に蒔いた種が共愛学園でどのように芽吹いたのか、少しでも感じ取っていただけたら幸いです。キリスト教の精神に基づいた学びや社会課題への取り組みは、同志社から始まって多くの人々の手によって上州近現代史の中で豊かに花開いたように思います。これまでがそうであったように、これからも、この精神を共愛学園で受け継いでいくことがなによりも大切だと考えています。

今回は長く豊かな歴史の内ほんの一部分を概括したに過ぎません。どうぞ興味を覚えた

方は、ぜひ実際に当地に足を運んで、教会やその歴史に触れていただけますでしょうか。

きっと、同志社で、あるいは共愛学園で、今を生きている私達の学びの糧になることと思います。

〔参考文献〕

大嶋果織 2017「周再賜の信仰と神学（1）―初期の著作の検討から―」『共愛学園前橋国際大学論集』17:91―104頁

大嶋果織 2019「周再賜の信仰と神学（2）―戦時下の著作の検討から―」『共愛学園前橋国際大学論集』19:71―93.

共愛学園百年史編纂委員会 1988a『共愛学園百年の歩み〈1888―1988〉』共愛社共愛学園。

共愛学園百年史編纂委員会 1998年b『共愛学園百年史 上巻』共愛社共愛学園。

共愛学園130年史編纂委員会編 2018『共愛学園130年の歩み〈1888―2017〉』共愛学園。

阪口直樹 2002『戦前同志社の台湾留学生―キリスト教国際主義の源流をたどる』白帝社。

清水安三編『周再賜先生の生涯』賜千会 1976。

杉本星子 2006「日本の近代製糸業とキリスト教精神」杉本良男編『キリスト教と文明化の人類学的研究』国立民族学博物館調査報告 62:71―91.

萩原俊彦「同志社人物誌 77 周再賜―差別と迫害に抗した教育者」『同志社時報』103 同志社時報社 1997年 37―43 頁

新島学園女子短期大学新島文化研究所『アメリカン・ボード宣教師文書 上州を中心として』新教出版社 1999年

本井康博「同志社人物誌 86 新島襄を看取った「熊本バンド」不破唯次郎」『同志社時報』114 同志社時報社 2002年 46―51 頁

山下智子編『群馬のキリスト者たち』聖公会出版 2012年